

雨と共に生きる人間のあり方 ～古典和歌の分析を通じて～

自然・環境マネジメント研究部 環境計画研究グループ

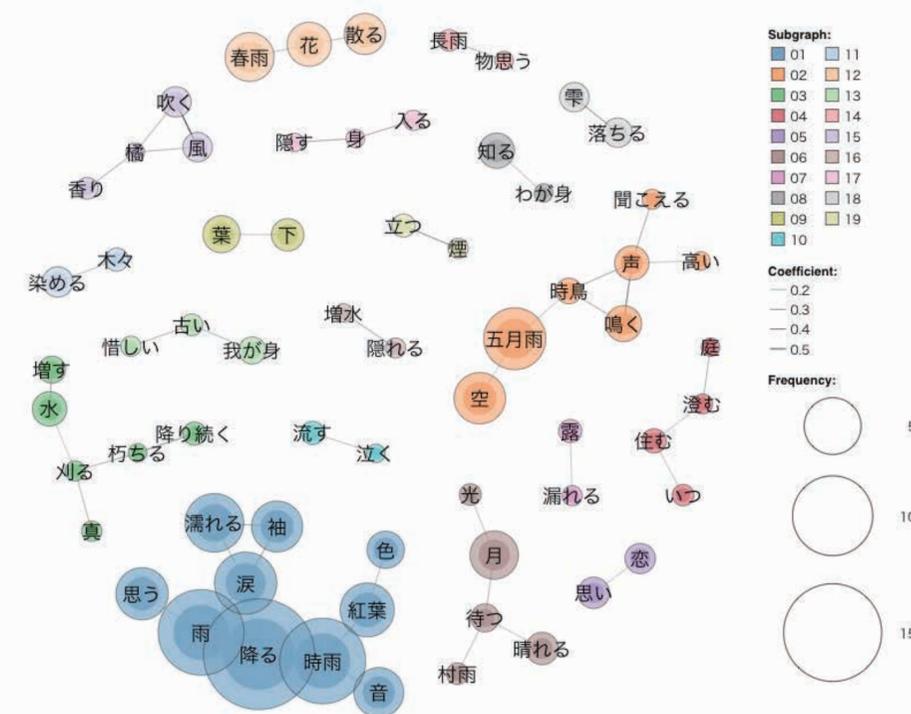
高田 知紀



日本の各地で豪雨災害が頻発するようになり、わたしたち一人一人が、日常で雨水とどのように接していくか考え直す必要が出てきています。そのような姿勢を醸成することは、流域全体で、そこに住む全員が水の恵みとリスクを公正に引き受ける「流域治水」の実践につながります。

雨という気象に対して日本人は特別な感性を有しています。日本には雨に関連する実に多くの言葉が存在しているからです。また、短歌や俳句、詩、浮世絵などの作品においても、雨の情景を描いた多くの作品が生み出されてきました。日本人はどのように雨と向き合ってきたのでしょうか？

日本の古典和歌における詩的表現のなかに、古来、雨を肯定的に捉えてきた人びとの視点を見出すことができます。右の図は、平安時代以降に編纂された8つの歌集(八代集)によまれた雨の和歌を分析した結果です。「雨」という語と共に、「涙」「濡れる」「思う」という言葉が用いられています。この結果から、自身の悲しみや他者への想いといった感情を雨の風景の描写のなかに表現していることがわかります。歌のよみ手は、雨や、雨によって様々に変化する環境・自然物を単なる対象としてみるのではなく、自己のあり方を雨という気象に投影し、さらに雨によって形づくられる環境の様が自己を規定しているように言葉を紡いでいたのです。



雨の和歌に出現する語の共起ネットワーク図